

新型コロナウイルス感染症について(第五報)

～ 保育園での行事・イベントを検討する ～



国立感染症研究所感染症疫学センター 菅原 民枝 大日 康史

本誌9月号にて、「新型コロナウイルス感染症が発生した場合の心構えと保育園の行事とイベントを考える」にて、保育園内で発生した場合について、行事やイベントについて検討することをお伝えしました。その後、皆さまの保育園での感染症対策委員会は開催されましたか？行事・イベントを実施するかどうか、感染防止の視点について、検討できましたか？

従来のやり方では、今後、行事・イベントを実施するのは難しいです。では、「中止」しかないのでしょうか？「延期」はいつまで？従来の方法だけを検討していると、中止の判断しか選択肢がありません。また、感染症対策をしないうで、行事・イベントを実施するということもありえません。

行事・イベントを考える前に、しなければならないことがあります。従来どおりにはいきません。他に、どのような方法を検討できるのでしょうか？まずは、そのことからしっかり理解していきましょう。

今月号では、より具体的に感染防止の視点で考えます。感染症対策をしながら「前向きに」行事・イベントをどのように考えていくのかをお伝えします。

(1) なぜ行事・イベントは従来のやり方では難しいのでしょうか？

感染症対策のポイントは、集団感染を防ぐことです。そのために日常の衛生管理と感染症拡大防止策の切り替えです。集団感染が起らないように、日常の衛生管理がしっかりできていれば、仮に園内、近隣地域内で感染症の発生があったとしても、その情報を把握して、しっかり切り替えていけば心配なことはありません。切り替えずに、毎日毎

晩消毒に明け暮れてしまうような対策ではなく、すべきことをする、しなくてもよいことはしない、流行の早期探知を行って、予防対策を徹底的に行っていくことが大事です。

行事・イベントを検討する際にも、日頃からの健康観察のサーベイランスは必須ですし、日常の衛生管理も必須です。そうしたことができていないのに、行事・イベントだけを検討していくことはできません。こうした視点は、例えば、空気清浄機を購入すれば対策はできている、という安易な対策案ではなく、いかに日常の衛生管理を徹底していくかという対策案のことであり、「いかに徹底していくか」ということが最も大事であるという認識です。そうした認識がないと、さまざまなゆりみがもたらした結果の集団感染になってしまうきっかけをつくってしまうことにもなります。

保育園で行われる行事・イベントの内、ここでは保育発表会を検討してみましょう。一人の園児に対しての観客は少なくとも2人～6人、きょうだいをいれると8人くらいになる可能性があります。1クラス20人であれば、少なく見積もっても、同じ時間帯に同じ場所に50人以上は集うこととなります。こんな大人数の観客のいるところで、堂々と演技や合唱合奏ができれば、どれだけの自信と力になるでしょう。子どもの笑顔に大人の笑顔があふれることでしょう。しかし、どんなに広い会場をもつ保育園でも、幼児クラスの3クラス合同で行ったとして観客150人以上を一斉に入場させ同一時間を過ごすことは、会場の広さが充分にとれない場合や換気が不完全な場合、『過密状態』です。ソーシャルディスタンス（社会的距離）をとることはできません。つまりこの状態は、密集状態であり、密閉状態であり、密接状態です。そ

うした中で、大声を出したり、換気がわなかったり、マスクを着用せず、手洗いもしていないと、何が起るでしょうか。集団感染の場を作り出してしまっていることになります。感染症の発症は確率的なこともありますので、全ての人が発症するわけではありませんが、このような過密状態、大声、マスク無し、手洗い無しでは、万が一症状を有する人がいれば、近くの人のみならず、同一時間同一場所にいた全ての人々に感染曝露を及ぼす機会が増大してしまい、結果的に集団感染を招くこととなります。

集団感染が起るとなぜ怖いのか…。これは、ここで書かなくても、皆さんわかっていますよね？

(2) 新型コロナウイルス感染症の現在の状況

経済産業省によるGo To イベント事業が開始されたので、流行が終わったかのようにお思いでしょうか？

新型コロナウイルス感染症は、いまだワクチンも治療薬もできていません。また日本での患者数は、諸外国に比べて少なく、死亡者も多くはありません(2020年10月18日現在)。当時、まだ国内での患者数が少なく、諸外国での状況から地獄絵図のようになると言われていましたがそういう状況にはなってはいません。これは、日本の医療従事者のおかげでもありますし、保健所のおかげでもありますし、医療制度そのもののおかげでもあるといえます。しかし、今後大きな流行がおこらないとは、言えません。今まで以上の大きな流行になるかもしれませんが、このことは誰にも分かりません。楽観はできません。侮ってはいけません。見くびってはいけません。軽んじてはいけません。備えて待つしかないのです。

しかし、3月4月のときと同じでもありません。多くの科学的な知見が集められており、どのように予防対策をしていけばよいのか明らかになっていることもあります。現在の流行状況の俯瞰した全国の様相を国立感染症研究所も行っていきます。それぞれ自治体においてもまとめられてい

ると思います。そうした情報収集をして、現在、流行状況はどのような状況ですか？

本誌3月号で最初に皆さんにお伝えしたように、新型コロナウイルス感染症対策への3つの視点、**①最新の発生情報を収集すること、②基本的な感染症の対策を徹底すること、③子ども及び保護者が差別的な扱いを受けないようにすること**、このことは変わりません。

この1つ目を実行していますか？状況を知らないで、緊張状態にありませんか？この新型コロナウイルス感染症の流行状態は長期化していますので、この先も対応をしていくこととなるでしょう。2つ目の基本的な対策を「徹底する」ことが大事です。日常の衛生管理を、間違ったことをしていないか、やりすぎていないか、やるべきことをしていないかと、しっかり見直すことが大事です。3つ目のことは、最初にお伝えしましたので、保育園の関係者の皆様は大丈夫だと思います。この基本的な人権のこと、差別的なことにならないようにしていかないといけないことは、心にしっかり刻んでおきましょう。この3つの視点は変わらないのです。

(3) 新しい取り組み

さて、感染症対策委員会という場合は、なぜ必要でしょうか？そうした場があることで、検討ができるためです。しよう、しようと思っただけでできないのが私たちです。しよう、しようと思っただけの気持ちを具現化するためには、時間と場所が設定されることが大事です。社会人になると締切があるのは、そうした理由のためです。見直しの場があってこそ、新しいことに取り組みます。

見直しをするべきことはして、その上で、何ができるのか、どうしたらそれができるのかを前向きに検討していきましょう。とはいえ、冒頭にお伝えしたように、これまで通りのことができるわけにはいきません。ですので、新しい方法を検討していきます。

1つは、その行事・イベントはなぜ大事なのか

と明文化することです。例えば、保育発表会の場合を考えましょう。なんのためにしてきましたか。日常生活とは違う舞台の上での表現をすること、練習をすることで、上達すること。お友達と気持ちりが1つになることの喜び。なんととってもやり遂げたときの感動。こうしたことがあるのではないかなと思います（私は保育の専門家ではないので、やや保護者視点になってしまいます）。保護者は、その成長をみることに以上、その過程での声かけを通しての喜びもあります。

こうした行事・イベントへの想いをまず確認することは大事だと思います。そのうえで、そうした子どもの成長を助ける行事・イベントを、したいのか、しなくてもいいのか、優先度は高いのか低いのかを考えてみましょう。そして、ぜひ実行したい、と思われるのであれば、どうやって実行することができるかを考えましょう。実行することが先にあるのではなく、どうして実行したいのか、その「熱意」が大事なのです。この理由は最後にお伝えいたします。

2つ目は、実行するための企画は複数の選択肢を用意することです。それぞれの保育園でこれまで大事に行ってきた行事・イベントがあると思います。例えば、保育発表会は例年であれば12月の第2週にしていたとします。これは1つの選択肢のみしかないような場合です。おそらく日程が先に決定しており、あわせて内容を検討していたかと思います。しかし、今後の状況はどのようになるのかは誰も予想がつきません。日程を決めてしまい、内容を決めてしまったら、どうやらできそうにないという状況になったときに（例えば、実施日の1週間前から園内で感染者が多数発生しているといったような場合）、「中止」しか選択肢がなくなります。

現状の新型コロナウイルス感染症の疫学を検討してみると、現在最も罹患しているのは、20歳代・30歳代で、10歳未満は非常に少ないです。一方で、60歳以上の高齢者においては、罹患者も多いですが、死亡者も他の年代に比べて高いです。

つまり、高齢者は重症化のリスクが高いのです。そして一方で、今後の流行はどうか分かりません。いつまで流行するのかも分かりません。

どのような観点で検討をするか。ソーシャルディスタンスを保つ「複数の選択肢」で検討しましょう。その場合には、さまざまな縮小化を検討することにもなります。物理的に密集する人数、時間を縮小するという観点で、あるいは、内容を複数回に分散させるという観点で過密状態を防ぐことが可能になります。また、ソーシャルディスタンスを保つことができるオンライン方式との併用をも検討してみましょう。

（４）屋外での実施

ソーシャルディスタンスを保って過密状態を回避する方法として、行事・イベントの屋外での実施があります。屋外であれば、換気ができないという心配ありませんし、可能なかぎり距離もとりにやすいので、密集、密閉、密接を防ぐことが可能です。しかし屋外の欠点は、天候の影響を受けやすいこと、そして音の問題です。近隣の方々に理解を求めなければなりません。またいくら屋外といっても、狭いところに人数が多くなれば、密集となる可能性もあります。人数の配置場所や導線といったことも考慮しましょう。

（５）入場者の制限と時間の制限

行事・イベントの複数の日程が可能でしょうか。もしかすると、予定をしていた日の前の週から急増するかもしれませんし、予定をしていた日の1か月後から減少するかもしれません。日程を複数用意すれば、状況を見て判断をすることが可能になり、観客も複数の日程を予定に組み入れます。また複数日程開催できれば、物理的に入場者が分散されることにもなります。

複数の時間帯が可能でしょうか。一日2～3公演です。子どもが何回も対応できるかどうかによりますが、同じ内容を複数回実施できると、先の同じ会場に50人が3回となり、50人であれば、

ソーシャルディスタンスを保つことが可能になるかもしれません。このことはクラス別に日程を組むこととも同じ意味になります。複数回数開催できれば、物理的に入場者が分散されることにもなります。

都合上どうしても1日しか用意できないような場合があります。そういう場合は、入場人数や時間を縮小させます。例えば、観客は園児の保護者1名のみにするといった方法や、開催時間を2時間から1時間にするということです。この方法は、入場者の制限にはなりますが、観客の満足度を下げることにつながります。また、開催時間そのものを短くしても同一場所に集中しているので、ある程度リスクを下げることはなりますが、ソーシャルディスタンスを保つことはできません。

(6) 制限だけではなく、オンライン方式との併用

行事・イベントは子ども本人のみならず、保護者、家族（きょうだい、祖父母等）にとっても楽しみにされていらっしゃることでしょう。保護者1名にするとケンカになるかもしれません。そこで、制限をするだけでなく、オンライン方式との併用を検討してみましょう。会場から撮影をして、オンラインで中継を試みるのはいかがでしょうか。こういうときこそ、専門家をお願いしてもよいと思います。現在インターネットを介して、さまざまなLIVE配信ができます。いわゆる「生中継」を保育園が試してみたいのはいかがでしょうか。新しいことに抵抗があるかもしれませんが、こういうときこそ、新しい取り組みです。カメラの台数やカメラアングルにも配慮して、子どもの顔や会場の様子がリアルタイムでかつ大画面で伝わることによって、その日の夜にお孫さんとお話をする祖父母の方々の感想も、いままでと同じくらい感動を与えられることと思います。もしも中継ができなくとも、複数のカメラで全体だけを記録用録画として映すカメラではなく、一人ひとりを拡大撮影もするカメラアングルも検討してみたいか

がでしょうか。

このように実際の会場ではなくLIVE配信をする方法には公開の形態として（一般公開ではなくパスワードで視聴者を限ることができます）、「Cluster」、「Zoom」、「YouTube Live」、「ホームページ」等が使われています。Clusterというのは、パソコンやスマートフォン、VR（バーチャルリアリティの略で、仮想現実と訳されています）機器など様々な環境からバーチャル空間に集って遊べる、マルチプラットフォーム対応のバーチャルSNSのことです。音楽ライブや発表会などのイベントに使われています。Zoomは、パソコンやスマートフォンを使って、セミナーやミーティングをオンラインで開催するために開発されたアプリケーションで、対面のセミナーやミーティングと同じように使われています。YouTube Liveは動画投稿サイト上でライブ配信ができるサービスで生放送もできます。ホームページでは写真や動画をリアルタイムに更新させることも可能です。こうした動画配信の形態は、9月号でもご紹介したイギリスのエジンバラフェスティバルでは、YouTubeチャンネル、Facebook Live、BBCスコットランドで中継したそうです。

こうしたオンラインを併用する行事・イベントは、会場において観客の入場を完全に制限することになったとしても、行事・イベントそのものを中止にすることはありません。同時に準備しておくことで、いずれかの方法に切り替えることができます。子どもたちは、予定どおり、発表会をすることができます。満席の観客が実感できないかもしれないけれど、オンライン双方向であれば、一緒に見ている方々の顔を映し出すこともできますし、その場で、感想を言っていただくこともできます。ソーシャルディスタンスを保ちつつ、同じ時間を共有することが可能になります。

感染症対策は「切り替え」が大事でしたね？状況を見極めてこうした行事・イベントの実行手段を切り替えていくためにも、ぜひオンラインでの新しい取り組みをもご検討ください。

(7) 今がターニングポイント

このように、いくつもの形態が用意されていますので、どれか利用してやってみませんか？いずれにせよオンラインですので、ソーシャルディスタンスは保てます。新しい取り組みに、祖父母の方も関心をもってくださるかもしれませんし、こういうことを通して、新しい世界観を知ることにもなります。お孫さんのこれからは、こうしたツールをさまざま用いることになりますので、新しい世界を知ることができる、そういう機会をも保育園が提供することとなります。もちろんこれまでのような、手作りのあたたかい雰囲気ということも、十分に表現できるようになります。決して最先端のおそろしいものではないのです。これから通信環境では5Gと言われる第五世代移动通信システムになっていきます。高速で大容量の通信が常時接続されて、多数同時にという状況及び技術は社会インフラにもなっていくと思います。例えば、ほとんど未来だと思っていた自動走行する車、ドローン、VR、医療においても遠隔医療、遠隔手術などなど技術は進歩していくこととなります。そうした技術を保育に取り入れるということを行っているのではないのです。そうした世界に、子どもたちは旅立っていくのです。少しでも新しいことに取り組むことができるチャンスがあったら、この機会を使って、取り組んでいきませんか。感染症対策をしつつ行事イベントを考える。そうしたら、もれなく新しい形の行事・イベントにもなっていく…。おそらく、今後の社会のターニングポイント（分岐点、変わり目、転換期）になるのだと思います。

(8) 行事・イベントを実施する際に注意すること

時間や人数の制限による縮小化を検討したうえで、会場に人を集合させる行事・イベントを検討した際、以下のことに注意をしましょう。これは、内閣官房の新型コロナウイルス感染症対策分科会

の資料^(*)にもありますので、政府見解を参考にしながら、具体的にみていきましょう。

* 出典：https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ful/yusikisyakaigi.html#3

主催者とは、行事・イベントを行う側なので、保育園になります。

演者・スタッフとは、その行事・イベントの催し物の当事者で、園児及び職員です。

参加者とは、行事・イベントの観客で、多くは保護者等です。参加者（観客）には事前登録者と未登録者があり、未登録者は不特定多数になります。保育園では登録者だと思いますが、不特定多数の場合には注意が必要です。

新型コロナウイルス感染症をはじめ、呼吸器感染症の場合（インフルエンザやRSウイルス感染症も含まれます）は、飛沫感染防止策と接触感染防止策が大事になります。

① マスク着用の担保

演者・スタッフ及び参加者全員、飛沫感染防止対策として、マスク着用、咳エチケットをします。基本的には小学生以上はマスク着用をします。着用の状況が確認でき、個別に注意等ができることが大事です。マスクを持参していない者がいた場合は主催者で配布をする用意はしなければなりませんし、参加者のうち登録者には事前にマスク着用のことは伝えておく必要があります。

② 大声を出さないことの担保

大声を出すと飛沫が飛びやすくなります。行事・イベントの中に大声を出す者がいた場合、個別に注意等ができることが大事です。主催者及び演者・スタッフもマイク等を使ってアナウンスする場合には、マイクが共有物品になることの注意が必要です。スポーツ観戦（運動会）等では、参加者（観客）が大声になりやすいので、注意が必要です。ここでは、隣の席の方との日常会話程度は（マスクの着用が前提）大丈夫ですが、演者が歌唱等を行う場合、舞台から観客まで一定の距離を確保（最低2m）することが求められています。

この①と②は行事イベントを実施する際には、徹底されているかどうかを確認する必要があります。そのうえで、③～⑩を検討します。

③手洗い

接触感染対策防止策として、最大の予防策は手洗いです。ここでは主催者が、演者・スタッフにこまめな手洗いの奨励をします。参加者には、手洗いをして入場していただくように促します。手洗い場が会場入り口にあるかどうかの確認が必要です。

④消毒 ・ 主催者による施設内のこまめな消毒、 消毒液の設置、手指消毒

接触感染対策防止策として、主催者が物品等の消毒をし、演者・スタッフ・観客の手指の消毒をします。環境消毒については、施設責任者と打ち合わせをしておきましょう。物品は、可能なかぎり共有しないものとしますが、共有する場合は、手洗いをしっかり行います。手洗いが出来ないような場合、あるいは、不十分である場合には、手指の消毒を行います。消毒液を導線にあわせて配置し、入場する際には手指の消毒を行います。

⑤換気 ・ 法令を遵守した空調設備の設置、こまめな換気

主催者は、会場の空調設備の確認を行い、開催中にも換気を行います。特に、演者・スタッフの控室（休憩室）では密集しやすいことから、定期的な換気を行います。窓のない部屋では特に配慮が必要です。天井が高い会場であっても、換気を行います。エアコンを使用している際にも換気は必要です。密閉空間にしないことが大事です。サーキュレーター等を使用することも検討します。

⑥密集の回避 ・ 入退場時の密集回避（時間差入退場等）、待合場所等の密集回避

主催者は、会場内において密集する場所があるかどうかを確認します。例えば、行事・イベントで参加者も必要な（あるいは購入するような場合）物品の受け渡しの場所や、衣類等を預ける場所等については、密集を回避します。同一時刻にならないようにする、事前に配布する、事前にオンラ

インで注文ができる等を検討し、荷物を置くところはないことを事前に伝えておく必要もあります。特に冬は防寒着等で参加者の荷物が多くなることも予想されます。また、入退場の際に参加者が一か所に集中して混雑する可能性がある場合には、時間差をつけて入退場する、一方通行にする、出口等を複数用意する等を検討します。さらに、休憩時間あるいは開催時刻前に待ち合わせをする場所等で混雑が想定されるような場合があるかどうかを検討します。いずれにしても、参加者が、演者を観ている時間以外について検討します。

⑦飲食の制限 ・ 飲食用に感染防止策を行ったエリア以外での飲食の制限

主催者は、演者・スタッフの飲食については、同じ飲み物、食べ物を共有することがないように十分に感染防止策をとり、飲食をする場所も決めます。観客については休憩時間中も含め、会場内の軽食等制限し、事前に伝えておきますが、飲み物については、会場内のどこで飲んでよいのかを伝えます。演者・スタッフのイベント前後の食事会については、制限し注意を促します。

⑧参加者の制限 ・ 入場時の検温、入場を断った際の払い戻し措置

主催者は、参加者に入退時に制限があること（政府から入国制限、入国後の観察期間を必要とされている国、地域等への渡航等）や検温をすることを事前に伝えます。来場者カード等を作成し、事前に注意事項を伝達し、参加費用を徴収するような行事・イベントでは払い戻しの措置を検討します。

⑨参加者の把握 ・ 可能な限り事前予約制、あるいは入場時に連絡先の把握

主催者は、参加者について事前登録をし、来場者カード等で連絡先を把握しておきます。来場者カード等は個人情報なので、取り扱いには注意します。未登録者が参加者に含まれる場合には、入場の際に手続きが必要であるうえ、来場者の人数を把握することが非常に困難になりますので要注意です。

⑩催物前後の行動管理・イベント前後の感染防止の注意喚起

主催者は、演者・スタッフに行事・イベントの前後2週間の行動記録をしておくことを伝えます。感染者が発生したときは、保健所の指示に従います。行事・イベントの前後2週間の健康管理は必須です。

(9) これから

行事・イベントを中止したので、非流行期には実行したいと考えた時、どのように見極めますか？

これまで、感染者の発生もない日々が続いている、だからといって、この先も継続できるかどうかは、誰もわかりません。ですから、「感染症対策」をしながら、集団感染をしないような行事・イベントのあり方の検討をお願いします。

まずは、これまで感染者が発生していないとすれば、そのことには感謝するとともに、しかしながら、大変な思いをしていた人がいないかどうかと心を寄せることも大事です。職員やご家庭内でも、自分が感染したら大変なことになるのではないかと、どこにも出かけないで予防活動をされてきた方も多いと思います。こういう方にも気持ちを寄せましょう。そして、例えば、もしかしたら、感染者が発生して、園内で集団感染がおきていたかもしれないと想定することも大事です。健康危機管理です。そうしたことも、感染症対策委員会等で関係者と共有することによって、必要な物品や人員の予算をたてることができます。想定しておかないと、予算を計上することができません。そして保護者にも保育園の気持ちを伝えましょう。保護者との信頼関係はより一層強固なものになるでしょうし、安心感があります。これから先のこととは誰も完全にわからないのですから。

現在、これまでとは同じではない行事・イベントを検討することは、これからの行事・イベントにおいても役立つこととなります。多くの人が集まる場において、感染症の集団発生のリスクはこ

れまでもありました。結果的に集団感染になった事例もあります。しかしだからといって、恐れすぎて中止にしていたのでは、子どもも保護者も先生も、がっかりな気持ちだけが残ります。流行が収まってからするから、といって、いつ流行は収まるのでしょうか。紹介した動画配信等は、いつか使えるとよいと思っていたオンラインのツールです。今がチャンスなのだと思います。こうしたツールを使いこなすことは、いずれ将来に振り返ったときに、あの時からこんなふうに行えるようになったなあ、と思えるはずですよ。

最後に、こうした取り組みでなぜ「熱意」がいるのでしょうか。ここまで読んでくださった方(長文だったと思います。ありがとうございます。)は、なんとかして行事・イベントはできないものかと思ってくださってきたと思います。しかしながら、多くの心配事が頭をよぎって実行ができません。誰にも相談ができていなかったことでしょうか。そして、「なにやら、今までとは同じではダメで、新しいことに取り組んで！って言うてるし、するとなったら10個もポイントがあるしで、もうしないほうが楽なのかも…」そう思われましたか？新しいことに取り組むには、相当のエネルギーがあります。熱意です。子どものために、どうか熱意をもっていただけないでしょうか。

こうした熱意をもつ仲間は必ずいます。新しい取り組みをする際に、新しいメンバーに入っただけをお勧めします。これまで検討してきたメンバーだけで考えていると、硬直化しやすいのです。集団感染のリスクだけを検討していると、「これまで通り」という考えだけ検討していると、中止しか判断できなくなります。二者択一しか選択できないような状況ではなく柔軟な対応をしていきましょう。新しい視点に立てる、いまはチャンスです。

もちろん、地域内の感染症の流行が増加傾向であったり、園内での発生があるときには、中止の決断をお願いします。複数の選択肢を用意して準備をお願いいたします。